

原著(Article)

小学校3年生の社会科における今後の「歴史学習」の在り方についての考察

——新内容「市の様子の移り変わり」を取り上げて——

Consideration on the future history education of social studies of 3rd grade elementary school: Taking up new content “Changes in the state of the city”

相川 保敏*・森 和久**・三浦 友久***

AIKAWA, Yasutosi* MORI, Kazuhisa** MIURA, Tomohisa***

キーワード：社会科，歴史学習，学習指導要領

Key words：SHAKAIKA (social studies), history education, course of study

1. 研究の背景と目的

小学校では本年度より新しい学習指導要領（「小学校学習指導要領（平成29年告示）」以下『29要領』）が完全実施となり，新型コロナウイルス感染症対策下において，様々な制約を受けながら学校現場では実践が進められている。『29要領』の改訂に伴い，小学校社会科においても教科目標・学年目標などが「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱に沿って明確化されたり，第3学年と第4学年の「目標・内容」を分け，系統的，段階的に整理されたりした。具体的な教科指導に直結する「内容」に目を向けると，中学校への接続・発展を視野に入れて，①地理的環境と人々の生活，②歴史と人々の生活，③現代社会の仕組みや働きと人々の生活，の3つの枠組みに整理されるとともに，学年ごとにそれぞれ範囲や対象が区分された。さらに，現代的な諸課題を踏まえる観点，持続可能な社会づくりの観点から，その充実も図られている。

こうした中，具体的な学習指導を進めるにあたって注視しているのが，第3学年に新たに設定された内容(4)「市の様子の移り変わり」（以下『29内容(4)』）である。社会科の中で初めて「歴史」との出会いとなる「内容」で，当然ながら枠組みは「②歴史と人々の生活」に区分されている。

これまでの「小学校学習指導要領（平成20年告示）」（以下『20要領』）と比較してみると次頁の表1「小学校学習指導要領の平成29年版の内容(4)と平成20年版の内容(5)との比較」のようである。ただし，『29内容(4)』は新たに設定された「内容」であるので，比較するのは『20要領』の第3学年及び第4学年の「内容(5)」（以下『20内容(5)』）の「ア」（イ・ウは今回の改訂により，第4学年に移行）と比較していくこととする。

* 名古屋市立白鳥小学校 ** 椋山女学園大学教育学部 *** 名古屋市立栄小学校

本論文は椋山女学園大学教育学部紀要の投稿・執筆規程2に基づき査読を受けた（2020年11月11日受付；2020年12月15日受理）

表1. 小学校学習指導要領の平成29年版の内容(4)と平成20年版の内容(5)との比較

小学校学習指導要領 (平成29年告示)	小学校学習指導要領 (平成20年告示)
<p>2 内容</p> <p>(4) 市の様子の移り変わりについて、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 次のような知識及び技能を身に付けること。</p> <p>(ア) 市や人々の生活の様子は、時間の経過に伴い、移り変わってきたことを理解すること。</p> <p>(イ) 聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめること。</p> <p>イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。</p> <p>(ア) 交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現すること。</p>	<p>2 内容</p> <p>(5) 地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。</p> <p><u>ア 古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子</u></p> <p>イ 地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事</p> <p>ウ 地域の発展に尽くした先人の具体的事例</p> <p style="text-align: right;">(下線は筆者)</p>

『20内容(5)』アでは、「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」を中心に、身近な地域の人々の生活の変化について学習する「内容」であった。これが『29内容(4)』では、「市の様子の移り変わり」に焦点を当てるため、生活の「道具」に加え、「交通」「公共施設」「土地利用」「人口」などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の変化について学習していくこととなる。『29内容(4)』にかかる「内容の取扱い」をみると、昭和、平成などの「元号」や公共施設の整備における「市(役所)」の働きを取り上げること、「租税の役割」、「少子高齢化」「国際化」などに触れること、「市の発展」について考えることなど、多くの社会的事象を取り上げて学習を進めていくように示されている。

このように、第3学年の児童にとって初めての歴史学習になる『29内容(4)』は、これまでの『20内容(5)』と比べて大きく変容している。また、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編の『29内容(4)イ(ア)』にかかる解説では、「例えば、駅や鉄道、公共施設ができたこと、人口が変化してきたこと、土地利用の様子や生活の道具が変わったことなどを相互に関連付けたり、市の様子の変化と人々の生活の様子の変化を結び付けたりして(下線筆者)」というように、児童が実際に見たり聞いたり使ったりできる「生活の道具」の変化と人々の生活を結び付ける「歴史学習」から、取り扱う社会的事象間の因果関係まで考えていくように変わってきているのである。

歴史学習におけるこうした内容の変化は、学習者である第3学年の児童にも十分理解できるものなのであろうか。歴史意識の発達という視点から、まずは考えていきたい。歴史意識とは、社会科教育指導用語辞典(1986)によれば「一般的には歴史に対する知的反応態勢の全体を指す。それは歴史の見方、考え方、歴史観などを生み出す母胎となる意識であり、しかも生活に密着した意識形態である。」としている。この歴史意識がどの様に発達していくのかを理解していくことは、歴史学習を進めていく

上で重要である。歴史意識の発達研究は1950年代から数多く行われており、その中で大きな影響を与えているのが、小・中学生の歴史意識の実態を体系化した斎藤(1953)の研究である。斎藤によれば、歴史意識は学年の発達段階に対応して高まっていくとし、「①今昔の相違がわかること、②変遷(発達)がわかること、③歴史的因果関係が捉えられること、④時代構造が理解できること、⑤歴史の発展がわかること、という5層からなる」としている。そして、①②は、3年生から4年生にかけて急激に発達するという。また、藤井(1968)は、「児童・生徒の歴史意識(広義の意味における)は、その心理的発育によって規制されるとともに、生活体験や学習経験などを含めてのいろいろな社会的・教育的刺激の影響を受けている。」とし、心理的側面と体験的側面の両面の諸条件は「相互に影響し合いつつ、らせん的に歴史意識の成長を促すものとみられる。」という。そして、こうした複雑な発達相の中にも基本的な発達相を区別することは可能で、「小学校段階では変化の意識。中学校段階では因果関係の理解、高校段階では時代構造と発達の把握、大学段階では個性と意味の洞察」を歴史学習で目指すべきだとしている。この考えによれば、3年生は当然「変化」を理解する段階であると言える。宇都宮(2016)は、日本の歴史意識研究において藤井の研究は「1970年以降の歴史意識研究において斎藤と並んで引用され、日本の歴史意識研究の到達点とも称される」という。さらに宇都宮(2017)は「日本では、そもそも歴史意識の育成が教育目的となっていないため、その育成が十分検討されることはない。……歴史意識の育成という歴史教育学研究の観点から、歴史教育論を再考する必要がある。」と新たな歴史意識研究が必要であるといっている。

こうした研究成果を基に、『29内容(4)』の難易度を考えてみると、『29内容(4)』は、多様な社会的事象の時間的な変化を捉えるとともに、それらが相互に関連していることを捉えることを狙っていることから、斎藤の研究では①②からさらに「③歴史的因果関係が捉えられること」の階層まで及んでおり、藤井の研究では中学生段階に当たることから、第3学年の児童にとって難易度が高いものと判断される。

以上のように、実際の指導に当たり、指導時数が増えない中でこうした難易度の高さをいかに克服していくのか、学校現場に課せられた大きな課題といえる。そこで、本稿では過去の学習指導要領で、初めての「歴史学習」はどのように考えられ、どのように進められてきたのか、また、教科の主たる教材である「教科書」でどのように扱われているのかを調査・分析し、児童の実態に即した指導の在り方を考えていく。また、歴史意識の発達という視点からも分析していく際に、斎藤は歴史意識を心理的側面のみから発達を捉えており、藤井は小学校段階という一段階しかないという問題点がそれぞれあるが、一般的な3年生児童を想定して分析していくので、個々の体験的側面まで考えていく必要性が低いことから、斎藤の研究成果を指標としていくこととしたい。

2. 研究方法

2.1. 学習指導要領と検定教科書

60年以上にわたる小学校の社会科学学習の中で、初めての歴史学習はどのように位置づけられ、どのように指導していくとよいとされてきたのかを、第3学年の歴史学習にかかわる小学校学習指導要領社会科の学年目標、「内容」、および指導書・解説を基に整理、分析する。また、全国で採択されている「東京書籍（以下「東書」）」「教育出版（以下「教出」）」「日本文教（以下「日文」）」三社の検定教科書で『29内容(4)』にかかわる単元構成・指導時数、資料館等の見学などの具体的な活動、年表にまとめる活動を調査、分析する。

2.2. 児童への質問紙調査

現在の児童の「歴史意識」を本校（白鳥小学校）に在籍している第3学年の児童72人に質問紙によるアンケート調査を行い、「学校」「地域や熱田」「名古屋市」という空間的な広がりの中で「歴史意識」の初期段階である「①今昔の違いがわかること」の認識を探る。

3. 結果と考察

3.1. 学習指導要領での取扱いの変遷

ここで扱う学習指導要領は、「告示」となった昭和33年以降を対象として、年間指導時数、「変化を捉える社会的事象」や「取り扱う事項」の種類、そして齋藤（1953）による「歴史意識」の階層について整理・分析していく。表2に示したように、『29内容(4)』で扱う「変化を捉える社会的事象」及び「その他取り扱う事項」は明らかに多くなっていることがわかる。平成に入ってから学習指導要領をみると、「変化を捉える社会的事象」は人々の生活の変化が捉えやすい「生活の道具」が主役となっており、特に時間数が70時間に削減された平成10年からは「生活の道具」に特化されてきている。『29内容(4)』のように様々な社会的事象が取り上げられていたのは、ぐっとさかのぼって昭和33年・43年の学習指導要領となる。当時の小学校学習指導要領の社会科指導では、どのような学習をさせていこうとしていたのであろうか。

まず、昭和33年学習指導要領は、生田ら（2019）によれば、「経験主義の教育を是正し、系統主義学習を重視するとともに、基礎学力の育成」を目指した学習指導要領であり、道徳時間の特設により第3学年の社会科の年間指導時数が175時間から105時間に削減され、取り扱う「内容」も21から10に絞られた。表3の昭和33年で示したように、第3学年の「歴史学習」に主に関連するのは学年目標の(3)で、「内容」は(7)(8)が最も関わりが強い。「内容」の表記は具体的であり、「村（町）の人々」「父母、祖父母のこどものころ」といった表記もみられ、身近な人々の生活と密着した学習で

表2. 昭和33年～平成29年までの学習指導要領第3学年の歴史にかかわる「内容」の整理

項目 年 (時数)	変化をとらえる社会的事象						その他 取り扱う事項	歴史意識	時間を測る 物差し
	交通	公共 施設	土地 利用	人口	仕事	道具			
昭33 (105)	○	○	○	○	○	○	祭・行事／港・工場	今昔・変遷 因果	父母・祖父母が 子どものころ
昭43 (105)		○ (学校)	○		○		祭・行事, 史跡・記念碑/ 事件, 先人, 市の発展	今昔・変遷 (発展)	自分・先生・父 母が子どものころ
昭52 (105)	○	○ (学校)					行事, 文化財	今昔・変遷	—
平元 (105)	○					○	文化財・年中行事／家屋	今昔・変遷	父母・(曾) 祖 父母が子どもの ころ
平10 (70)						○	文化財, 年中行事/ 先人(4年生)	今昔・変遷	高齢者・父母が 子どものころ, 現在
平20 (70)						○	文化財, 年中行事/ 先人(4年生)	今昔・変遷	高齢者・父母が 子どものころ, 現在
平29 (70)	○	○	○	○		○	市の発展, 少子高齢, 国際 化, 租税, 元号, 地図	今昔・変遷 因果(発展)	—

(小学校学習指導要領および指導書・解説を参考に、筆者が作成)

表3. 昭和33年・43年の学習指導要領, 第3学年の歴史にかかわる目標・内容

年	学年目標	内 容
昭 和 33 年	(3) 村(町)の生活には、今昔の違い、歴史的な移り変わりがいろいろな姿でみられることを理解させ、先人の努力について考え、これを尊重し、感謝する気持を育てる。	(7) 村(町)の人々は、昔から神社や寺院などを中心として祭りその他の行事を催し、楽しみを共にしてきた。 (8) 村(町)の人口や集落の状態、人々の仕事の種類や方法、道路の様子などを見ても、父母や祖父母の子どものころに比べて変わった点は少なくないが、そこには鉄道やバスの開通、道路や港の改修、工場の設置など、村(町)の人々のいろいろな努力があった。
昭 和 43 年	(2) 地域の人々の生活にみられる歴史的な移り変わりに目を開かせ、先人の業績について考える態度や地域の発展を願う気持ちを養う。	(5) 市(町、村)の様子と人々の生活には、今昔の違い、歴史的な移り変わりがみられることを理解させ、その間の先人の努力について考えさせたり、市(町、村)の将来の発展について関心を深めさせる。 ア 自分の学校の沿革を調べたり、市(町、村)に残る史跡、記念碑などを観察、調査しながら、およそ100年にわたる市(町、村)の様子のおもな変化などを年表に整理すること。 イ 人々の生活の変化は、仕事の種類や方法、消費生活ばかりでなく、祭りその他の行事、楽しみのもち方などの面にまで及んでいることを調べ、特に変化の重要な契機になった事実や事件、先人のくふうなどについて考えること。 ウ さまざまな歴史的移り変わりを通じて、人々の生活の範囲が広がってきた事実に着目しながら、市(町、村)の将来の発展について考えること。

あったことが窺える。小学校社会科指導書（1960）に、内容(5)(8)(10)と深い関連があり、内容(3)(4)(6)(7)と関連する単元例として、「住みよい村へ（約24時間）」が例示されている。簡単に学習の展開を表すと、「1. ため池の埋立計画を知る。ため池の役割やできたころの村の様子を聞く。→2. 当時の村と現在を比較し、村や人々の生活の変化を調べる。→3. 村役場の村長さんへの聞き取りから、公共事業や村の将来、役場の働きを捉える。→4. 村人の賛同と協力、税金の必要性を捉える。→5. 村の発展・自分たちの協力について考える。」となっている。「展開の2」では年表を作成することも示されている。このように『29内容(4)』のねらいや学習活動も類似している点が多いが、複数の「内容」を組み合わせた総合的で長時間の単元構成となっていることや昭和恐慌・農地改革といった過去のできごとから、農産加工品の振興や出荷先の開拓といった今後の村の計画を考えるなど、高学年社会科で取り扱うべき内容も多く含まれている。こうした単元例を示す一方で、指導書には「(内容に示された)これらの全部に触れなければならないと窮屈に考える必要はない。」と記載されている。このように、昭和33年学習指導要領は、『29内容(4)』で扱う社会的事象や歴史意識の階層は似通っているものの、「内容」の扱い方、指導時間数、単元の作り方など大きく異なっており、『29内容(4)』の指導の手掛かりとなる点は見出しにくい。

次に、昭和43年学習指導要領は、生田ら（2019）によれば「人間形成の上から調和と統一のある教育課程の実現を図り、基本的な知識や技能を習得させることに重点」を置く能力主義に移行した学習指導要領としている。社会科においては第1学年の学年目標に「空間や時間についての意識を育てる」ことが明記されているのも能力主義の表れと言える。第3学年の社会科においては、年間指導時数は変わらないものの学年目標が4から3に、「内容」も10から5に絞られ、それぞれの表記は育成すべき能力を見据えたものに変更されている。第3学年の「歴史学習」に関連するのは、表3のように学年目標の(2)で、「内容」は(5)が該当する。(5)には「市（町村）の様子」「市（町、村）の将来の発展」と明言されており、『29内容(4)』と似通っている点が多い。小学校社会科指導書（1969）に目を通すと、目標や「内容」の解説、単元例ではなく、社会科の中で育成すべき能力やその指導の仕方が記載されている。その中で、「中学年の児童の歴史的なものの見方やその伸ばし方」が第2章第5節で述べられている。「たとえば市町村の移り変わりという単元の指導などの場合でも、いきなり50年、100年の昔にさかのぼる取り扱いをすることは、3年生にとっては飛躍がありすぎ、冒険といえよう。もともと時間というものは抽象的な概念であるし、10年前、20年前、あるいは100年前といわれても、その時間の長さがどれほどのものであるかは、中学年の児童にはなかなか見当がつかかねるであろう。そこで、いわば時間をはかるものさしになるような事実や経験を教師が親切に提示してやる必要がある。」「自分たちの生まれたころ、先生のこどものころ、父や母がこどものころというように、身近な対象をめやすにして、それが何年前ということをとらえさせることがたいせつである。そして、そのころは、現在とは違うが、その変化は年とともに順に変

わってきたものであり、現在と続いたものであるという理解をさせる必要がある。」と記載されており、中学年の歴史学習で留意すべき点が明記されている。この「時間を測る物差し」については、表2に昭和43年だけでなくこれまでの学習指導要領についても整理してあるが、昭和52年と今回の学習指導要領以外はすべて明示されており、「歴史学習」における必要性が窺える。「身近な人の子どものころ」が多く使われているのは、認識しやすく、その後の聞き取りも行いやすいからであろう。ただし、近年は「祖父母のこどものころ」でなく、「地域の高齢者がこどものころ」と変わってきている。児童が認識しやすく、身近な「物差し」を見つけていくことが、『29内容(4)』の指導でも大切となると考える。

最後に、「歴史意識」について過去の学習指導要領と比較していくと、表2のように斎藤（1953）の発達階層において『29内容(4)』は最も高度なレベルを求めていることがわかる。松岡（2006）は、博物館の体験活動における第3学年の児童の歴史意識の発達の変容を研究し、次のように述べている。「博物館の体験学習における歴史的思考は、歴史意識の発達のレベルを問わず、抽象的な歴史意識が具現化され、部分的には体系化される。」としており、「発達初期段階の児童の歴史的思考は、歴史時間の概念とされる「今昔の対比」「発達（変遷）の意識」の段階から、体系化した概念の相互関連を見出し、一層複雑な体系化の段階にある、歴史的思考の概念の段階（歴史的因果関係、時代構造、歴史の発展の理解）へと発展すると考えられる。」と述べている。『29内容(4)』が求めるレベルまで「歴史学習」において高めていくためには、松岡が言うような博物館・資料館などで、実際道具を見たり触ったり使ったりするような「見学」「体験」を大切にしていって学習活動を行っていくことが必要ではないかと考える。

『29内容(4)』は、過去の学習指導要領を基にした分析・調査から、年間指導時数が最も少なく、「変化を捉える社会的事象・取り扱う事項」が多く、「歴史意識」の段階が最も高い「歴史学習」であり、指導に当たっての有効な手掛かりはつかめなかった。しかし、これまで「歴史学習」で大切にされてきた「時間を測る物差し」「博物館等の活用」を念頭に置きながら、多くの社会的事象の変化を第3学年の児童にわかりやすく、効率的に学習を進める方法をさらに探る必要性を再確認した。

3.2. 検定教科書での取り扱い

『29内容(4)』の指導に当たって、多くの社会的事象の変化をわかりやすく効率的に進めていくのが課題となっている。小・中学校学習指導要領に関する解説Q&A（2017）で、『29内容(4)』が現行の学習指導要領に比べて難易度が上がったように感じるという声に対して、「これからの3年生の学習では、地域の調査や資料館等の見学などの具体的な活動と、地図や年表などの資料を用いて調べたりまとめたりする活動を効果的に組み合わせる学習展開を工夫し、深い学びの視点から、授業改善を目指すことが大切になります。」と応答している。「具体的な活動」と「調べたりまとめ

たりする活動」の組み合わせが課題解決の手掛かりと考えられる。

そこで、「東書」「教出」「日文」の三社が発行している検定教科書の『29内容(4)』にかかわる単元構成・指導時数、資料館等の見学などの具体的な活動、年表にまとめる活動を整理・比較していくことで『29内容(4)』の指導上の課題解決の糸口を探っていく。

3.2.1. 単元の指導計画の比較

表4「29内容(4)「市の様子の移り変わり」の三社の指導計画の比較」は、各教科書会社がweb上で公開している指導計画を参考に整理したものである。大単元の指導時間数をみると、東書はオリエンテーションを含めて全11時間、教出はオリエンテーションを含めて16時間、日文は大単元の導入を含めて16時間で計画されており、5時間もの開きがみられる。

教出は2つの小単元で構成されており、前半の「かわる道具とくらし(6時間)」では、これまでの学習指導要領に準じて「くらしの道具」の変化と「人々の生活」の変化を捉えさせる流れになっている。この学習によって「どれだけ昔なのかという物差し」をつくった上で、後半の「市のうつりかわり(9時間)」に進み、まだ取り扱っていない「交通・土地利用・人口・公共施設」を1時間ごとに順次調べ、それぞれの事象の変化に合わせて時期を提示していくといった流れになっている。

日文は教出と同じ時間数ながら、教出とは異なり、船や鉄道、高速道路といった交通機関ができたころを主な時間軸とし、複数の社会的事象を提示していく流れになっている。例えば「鉄道がとおったころ」の「市域の広がり」「生活の道具」「発電所建設」など組み合わせて提示し、「鉄道開通により、市域が広がった」ことから「交通の便が良くなると人が増える」といった事象同士の相互関係を捉えさせるようにしている。なお、「交通機関」は、変化や発達を捉える社会的事象として、古くは「交通の今と昔」という単元名で昭和26年・30年の学習指導要領の第4学年でもみられる。

東書は、他の2社に比べて5時間少ない計画になっており、「生活の道具」「交通機関」など、時間軸となるものを特に設けず、オリエンテーションで時代の物差しとして「祖父母が子どもころ」「父母が子どもころ」「今」の3つの時代区分を提示し、それぞれを「70年から60年ほど前」「50年から40年ほど前」「今」と表記するといった方法を取っている。そして、「交通・土地利用・人口・公共施設・道具」を1時間ごとに順次調べてまとめていくといった流れになっている。このように、三社とも単元の構成は大きく異なり、取り扱う社会的事象をうまく配列して全てを網羅できるように工夫をしながら計画を立てていることがわかる。

次に、大きなポイントとなる博物館・資料館の見学はどうなっているのか見ていきたい。日文は「博物館の見学」2時間、教出は「郷土資料館の見学」1時間、東書では「博物館の見学」「インタビュー」「見学のまとめ」の3つの活動で1時間となっている。三社とも見学先への移動時間は当然含まれていないが、1時間では到底できな

表4. 平成29年 内容(4)「市の様子の移り変わり」の三社の指導計画の比較

(丸数字は授業時間数)

教科書会社	東京書籍	教育出版	日本文教
大単元名	市のうつりかわり (全11時間)	わたしたちの市の歩み (全16時間)	市のようすとくらしのうつりかわり (全16時間)
単元の構成	① オリエンテーション	① オリエンテーション	① 大単元の導入
	小単元1 市の様子と人々のくらしのうつりかわり 10時間	小単元1 かわる道具とくらし 6時間	小単元1 うつりかわる市とくらし 15時間
	① かわってきた明石駅	① 昔の道具	② 博物館の見学
	① かわってきたわたしたちの市	① 学習問題をつくり、学習の見通しを立てよう	① 昔の交通のようす
	① 道路や鉄道のうつりかわり	① 郷土資料館をたずねて	① ふねが使われていたころ
	① 土地の使われ方のうつりかわり	① 昔のくらしをインタビューする	① ふねが使われていたころ～大火事のあったころ～
	① 人口のうつりかわり	① かわってきたくらし	① 鉄道がとおったころ
	① 公共しせつのうつりかわり	① 道具とくらしのうつりかわり【年表1】	① 鉄道がとおったころ～人々のくらし～
	① 道具とくらしのうつりかわり【年表1】	小単元2 市のうつりかわり 9時間	① 高速道路ができたころ
	② 市のうつりかわりをまとめてみよう【年表2】	① かわるまちの様子	① 高速道路ができたころ～人々のくらし～
① 市のはってんのために	① 学習問題をつくり、学習の見通しを立てよう	① 川越市の今～くらづくりの町なみを生かす～	
	① 交通はどのようにかわったかな	① 川越市の今～交通のはったつ～	
	① 土地の使われ方はどのようにかわったのかな	② 年表にまとめる【年表】	
	① 人口はどのようにかわったのかな	① 市の取り組み	
	① 公共施設はどのようにかわったのかな	① 川越みらいプラン	
	② 年表を書き足そう【年表2】		
	① 年表を見て話し合おう		

い活動が計画されていることが危惧される。実際の学校現場の状況を考えると、時間的な理由で見学を行わない学校も出てくるであろう。ここにも課題がみられる。

3.2.2. 「教科書」に例示されている児童がまとめる「年表」の比較

表5は、実際の教科書に記載されている単元学習のまとめとなる「年表」の内容を整理したものである。日文以外は年表が2つで構成されている。

東書は「生活の道具」に特化した年表1と、全体のまとめとなる年表2の2種類を組み合わせ、『29内容(4)』で取り上げる社会的事象をすべて網羅するようにしている。

年表1は先に述べた「博物館の見学」「インタビュー」「見学のまとめ」の3つの活動の中の「見学のまとめ」で作成され話し合う年表である。年表1と年表2は様式も全く異なり、目盛りも違っている。特に年表2は一般的な年表と異なり、区分ごとにまとめるという形式をとっている。また、時間を測る物差しとなるものはみられない。

教出は、前半の小単元のまとめとして「生活の道具」に特化した年表1と、後半の小単元で取り上げた様々な社会的事象をまとめた年表2から構成されている。2つの

表5. 三社が記載する教科書の「年表」の比較

教科書会社		東京書籍		教育出版		日本文教
学習問題		・わたしたちの市は、いつごろ、どのように変わってきたのでしょうか。		・道具が変わることで、人々のくらしはどのようにかわってきたのだろう。 ・市の様子はどのようにかわってきたのだろう。		・わたしたちがくらす市は、どのようにかわってきたのだろう。
年表名		【年表1】 道具年表	【年表2】 まとめの年表	【年表1】 まとめた年表	【年表2】 書き足した年表	【年表】 まとめの年表
区分	目盛り	・100年前 ・70年前 ・50年前 ・40年前 ・今	・70-60年前 ・50-40年前 ・今 (3区分に分割)	・100年前 ・50年前 ・30年前 ・今	・1920年 ・1970年 ・1990年 ・2020年	・140年前-0(10年刻み) ・1880-2020年(10年刻み)
	元号	・昭和・令和		・大正・昭和・平成・令和		・明治・大正・昭和・平成・令和
	時間を測る物差し			・祖父母が子ども ・父母が子ども		・祖父母が子ども ・父母が子ども ・わたしたちの誕生
年表の項目	交通	・鉄道 ・高速道路	・電車 ・高速道路 ・新幹線		・路面電車 ・新幹線 ・高速道路	・ふね ・鉄道 ・高速道路
	公共施設	・市役所 ・博物館 ・科学館	・学校 ・図書館 ・総合施設		・公園 ・福祉施設 ・動物園 ・市役所	・市役所 ・図書館 ・博物館
	土地利用		・田畑 ・団地 ・工場 ・宅地化		・田や山林 ・埋め立て ・団地	・工業団地
	人口		・10万人から25万人へ増 ・高齢者増 ・外国人の増		・100万人から300万人へ増 ・高齢者増 ・外国人6万人から9万人へ増	・1万9,000から35万人へ増 ・高齢者増
	生活道具	・炊事、洗濯器具の変化	・かんたん、手作り→電気をつかったもの→便利なものへと変化	・洗濯、炊事、音楽鑑賞器具の変化		・洗濯、炊事、明かり、暖冷器具の変化
	生活の様子	・市になる ・ラジオ放送 ・空襲 ・阪神淡路大震災など	・市町村合併	・関東大震災 ・空襲 ・めんこ遊び ・電化製品 ・テレビゲームなど		・大火事 ・電灯 ・市になる ・市町村合併 ・電気製品 ・自動車をもつなど

(三社の教科書記載の年表を基に筆者が作成)

年表をつなぎ合わせて、『29内容(4)』で取り上げる社会的事象をすべて網羅するようにしている。ただし、2つの年表の目盛りが異なっており、一つの年表とするには単純につなぎ合わせるだけではできない。

日文は、一つの年表にまとめられており、目盛りも10年刻みになっている。ただし、川越市を取り上げ、交通機関を時間軸にしているためか、これまでの学習指導要領で最もさかのぼる「100年前」を大幅に超える「140年前・1880年」が目盛りに刻まれている。この40年の違いは、一世代を超える期間であり、第3学年の児童にとってさらに認識しづらい時間にならないか懸念される。また、年表上では「土地利用」に関する内容が分かりづらく「外国人」についても記されていないなど、全体を網羅できていない。一つでは難しい面があると思われる。

このように、三社の年表を見てきたが、それぞれに工夫と課題が見受けられた。年表に充てられた指導時間は、東書が3時間、教出も3時間、日文が2時間であり、博物館等の見学より多くなっている。「具体的な活動」より「調べたりまとめたりする活動」を重視していると言える。完成した年表を基にする話し合いの中では、東書「人口が増えたから学校が増えた」、日文「鉄道は発電所ができたから。発電所ができたから電気が使える道具も変わった」、教出「人口が増え、住宅地が広がった。住宅地が広がったのは、鉄道や道路がつくられたから」といった「因果関係」段階まで及ぶ話し合いが設定されている。そして、市の将来や発展について考えていくことになっている。

ここまで、教科書を基に『29内容(4)』の指導の在り方を探ってきたが、このように網羅的に社会事象を取り上げて、相互関係から「因果」「発展」を考えていくという流れは、第3学年の児童が主体的に学んでいける学習にできるのだろうか。抽象的な思考が求められる「歴史学習」であるからこそ、より危惧される。学習指導要領に示されているからには、多くの社会的事象を網羅的に扱っていかなくてはならないだろうが、『29内容(4)』を第3学年の児童の実態に即したものになるように、もう一度実態に立ち戻り、よりよい指導を模索していくこととする。

3.3. 質問紙からみた児童の歴史意識

『29内容(4)』により難易度が高まり、初めての「歴史学習」が大きく変わってくる中で、実際に学習する児童の「歴史意識」は変わってきているのであろうか。表6は白鳥小学校に在籍している第3学年の児童72人を対象に、コロナ対策による休業措置が明けた6月に実施したものである。「①学校」「②地域や熱田」「③名古屋市」という空間的広がりの中で、「昔のことで知っていること」を自由記述させ、児童の「歴史意識」を探った。記述内容には、誤認識している事柄も見られるが「歴史意識」のみに焦点を当てて分析していくこととする。

まず、①の学校の歴史については、「知らない」と答えた児童が6割以上も占めている。知っている項目として、「二宮金次郎」をあげている児童が多い。これは、校

内に立っている銅像で、昨年度の朝会の際に「校内で一番本を読んでいる人クイズ」で取り上げたことが影響していると考え。表記全体を見ると「おばあちゃんのころ」「お母さんが子どものころ」といった「時間を測る物差し」が自然に使われていたり、「～前」「～して～になった」「～に～をやった」というように時間的な経過をきちんと捉える表記がみられたりしていることがわかる。ほとんどの情報は家族からのものである。元号として「大正」が使われている。

②の地域や熱田の歴史についても、「知らない」と答えた児童が4割以上を占めている。この中で、学校に隣接する「熱田神宮」や「熱田神宮にかかわる」できごとやいわれなどが多く、「熱田神宮＝昔」と認識している傾向が強い。そのため、毎年開かれる「粘土大会」「緑陰教室」、毎月開かれる「朔日市」などのイベントも「昔」という意識の中に入っているようである。また、「昔」の人として織田信長や徳川家康

表6. 第3学年児童の歴史意識に対するアンケート調査結果

① 学校の歴史	
<ul style="list-style-type: none"> ・知らない。46 ・二宮金次郎の銅像がある。10 ・おばあちゃんのころ給食にクジラが出た。3 ・お母さんが子供のころ給食はパンしか出なかった。2 ・白鳥小は森小学校（森後小学校？）だった。 ・何個かの学校が合わさって白鳥小学校になった。 ・学校の建て替え前は違う遊具があった。 ・白鳥小ができる前に白鳥がいた。 ・大正11年に白鳥の会をやった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・白鳥小は森小学校（森後小学校？）だった。 ・何個かの学校が合わさって白鳥小学校になった。 ・学校の建て替え前は違う遊具があった。 ・白鳥小ができる前に白鳥がいた。 ・大正11年に白鳥の会をやった。
② 地域や熱田の歴史	
<ul style="list-style-type: none"> ・知らない。31 ・熱田神宮。13 ・熱田神宮はもっと広がった。2 ・熱田神宮に大楠がある。 ・大楠に白蛇が住んでいる。 ・熱田神宮にはいろいろな神様がいます。 ・熱田神宮には、鏡・玉・刀のどれかがある。 ・熱田は信長の領地だった。 ・熱田神宮には信長塀がある。 ・熱田神宮に鶏が3匹しかいないが昔は200匹ぐらいいた。 ・熱田神宮の人は袴の色でレベルが違う。 ・熱田神宮に毎月1日に朔日市があって夏にお祭りがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・熱田神宮で粘土細工の大会をしている。 ・熱田神宮でこの前、緑陰教室をしていた。 ・津波が来ても壊れなかった。2 ・徳川家康が2年間閉じ込められていた場所がある。 ・大瀬古公園に船がある。2 ・大瀬古公園は昔海だった。 ・大矢蒲鉾店は江戸時代からやっている。 ・分団の集合場所の神社。 ・大和田ウナギ店が昔から有名。 ・神宮前の駅は60～70年前前からあった。 ・昔のゲームセンターがある。 ・わたしの家は水がいっぱいでした。（伊勢湾台風？）
③ 名古屋の歴史	
<ul style="list-style-type: none"> ・知らない。40 ・名古屋城。9 ・名古屋城の金シャチ。7 ・金シャチは何度も盗まれた。 ・名古屋城には織田信長が住んでいた。織田信長が死んで徳川家康が次の殿様になった。 ・名古屋城には侍が刀を預けたり休憩したりするところがあった。 ・堀川を利用して名古屋城の資材を船で流した。 ・名古屋城は一度焼かれて、証言や残った部品から予想してできた。 ・名古屋城には銃がいっぱいある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・名古屋城に本当の侍がいると聞いた。 ・昔はマンションがなかったが、名古屋城は昔からある。 ・熱田神宮。2 ・織田信長。2 ・味噌が有名。 ・ママが通っていた幼稚園がある。 ・熱田のイオンは先生が小学校の時にできた。 ・名古屋万博（デザイン博？）があった。2 ・2018年に港区にららぽーとができた。2 ・マンションでお金が盗まれたとき、鳥インフルエンザがはやった。

（白鳥小3年生72名，令和2年6月実施，自由記述，数字は人数，？は筆者）

の名前が挙がっているのは、「信長塀」や家康の「幽閉跡」などゆかりの史跡が学区内にあるからであろう。3年生の児童の中にもこうした偉人・史跡に対する認識があることがわかる。その他に、「大瀬古公園」「大矢蒲鉾店」といった表記がみられるが、これは生活科で出かけた公園と店であり、公園のレリーフや店主さんから聞いた「昔」の地域の様子等が児童の知識となっているためであろう。「大和田ウナギ店」「神宮前の駅」などは家族から聞いた話である。このように、学校から地域・熱田へと空間的な広がりの中で、児童が捉える社会的事象の数は大きく増え、その情報のほとんどが「自分が見たこと・経験したこと・聞いたこと」であり、こうした活動の大切さがわかる。また、空間的な広がりに伴い、認識する社会的事象が増える一方で「今昔」の混同が見受けられるようになってきている。元号の表記は見られないが、「江戸時代」という区分が使われている。

③の名古屋の歴史では、「知らない」と答えた児童が5割以上を占めている。名古屋の歴史といえば、児童の多くが「名古屋城」と認識しており、名古屋城築城と堀川との関係を知っている児童や戦災での焼失後に再建されたことを知っている児童もいる。また、ここでも、「ママが通っていた幼稚園」「先生が小学校の時」といった身近な人物が「時間を測る物差し」になっていることがわかる。一方で、現在の名古屋の観光PR部隊「名古屋おもてなし武将隊」を「本当の侍」として認識したり、「味噌が有名」と記したり、「今昔」の混同は相変わらず見られる。また、区内にある「熱田のイオン」や「2018年にできた港区のららぽーと」といった大型商業施設が名古屋市の「昔」を象徴するものとして認識していることから、空間的認識と時間的認識の双方がずれている実態も見受けられる。

中藤(1986)は地理学習に歴史的背景を導入するにあたり、小学校4～6年生を対象に小学生の「身近な地域」に関する歴史的・時間概念のアンケート調査研究を行っている。研究結果から、「児童における時間概念の空間的広がりには、4年生では自宅と学校の周辺に限定され、5年生では学区外まで拡大される。6年生では、その拡大とともにさらに諸変化に対する認識の密度が高くなる。」という。それは、「空間的概念の発達と比較して時間概念の発達が遅いことに関連していると考えられる。」としている。中藤の研究から、本校の3年生が、空間的な広がりの中での時間認識にぶれが生じていることも頷ける。『29内容(4)』の指導に当たり、本校の児童の実態から、「今昔」のブレが少ない学校・学区といった身近な地域の歴史を「時間を測る物差し」を使いながら学習していくことが必要であると考えられる。

3.4. 学校の歴史から始める学び

ここまで、過去の学習指導要領から『29内容(4)』の難しさが改めて確認され、「時間を測る物差し」や「博物館等の活用」が有効であるとしてきたが、実際の教科書を見ていくと「博物館等の見学時間」は実際には不可能な時数が提示され、「時間を測る物差し」がきちんと認識される流れではなかった。また、定められた社会的事象

や事項を網羅的に学習していく部分が多く、主体的な学びを期待することは難しくなっていた。児童の実態からは、やはり「身近な地域」から「時間を測る物差し」をしっかり持たせて歴史学習を進める必要性がみられた。

そこで、『29内容(4)』を学習するにあたって、まずは「学校の歴史」を学んでいくことから始めることを提案したい。それは、次の理由①～⑧からである。

- ①学校の歴史は、児童の実態からみると「今昔」がぶれにくい。今という時代を正に経過している場所であり、「現在」の認識が正確だからである。かつ、児童の共通の経験や認識を引き出しやすい。
- ②今と比較することが容易で、変化に興味や関心をもちやすい。「児童数」「学級の定員数」「給食」「教科」「行事」など。
- ③学校の歴史を探るにあたっては、身近な人「父母や地域の人、祖父母や地域の高齢者」から聞き取りしやすく、話す方も話しやすい。かつ、内容が理解しやすい。
- ④学校を調べるにあたって、ほとんど移動時間の必要がない。中には、校内に資料室などが設けられているところもある。
- ⑤学校には沿革史や記念誌、写真資料などが多く残っている。
- ⑥学校の変化は地域社会の変化に関連していることが多い。例えば、児童数の変化から、人口、土地利用、交通機関、少子化、国際化なども結び付けられる。
- ⑦学校の様々な施設や備品には税金が投入されている。
- ⑧学校は、昭和43年・52年の学習指導要領で取り扱われていた。現在の教科書でも、学校を公共施設の一つとして取り上げているところもある。

こうした理由から、まずは学校の歴史を学び、学校を「時間を測る物差し」として定め、そこから市全体ではどうなっているのかを上書きしていくように学んでいくのである。そのためには、実際に児童が自由に写真を調べたり、資料を閲覧できたりすることが重要である。学校には、沿革史や周年行事にあたっては冊子が作られることが多いが、第3学年の児童が調べられるようには、なっていないことがほとんどであろう。名古屋市内の社会科を担当している学校長への調査によると、90%以上の学校でこういった資料は残っているが新たに整理したり、検索できるようにしていったりする計画はないようである。文部科学省のGIGAスクール構想により、児童生徒のために一人1台のPCと高速ネットワーク環境が整備される中で、児童が自ら調べられるようにしていくことは重要である。教育の情報化に関する手引き―追補版―（令和2年6月）にも、「学習のねらいを明確にして教育用コンテンツを探した場合でも、必ずしも、ねらいに即したコンテンツが容易に見つかるとは限らない。このような場合、教員自身でコンテンツを作成することもある。」と教育用コンテンツの自作の必要性を述べている。また、今野（2017）は、歴史学習において「学校沿革史」「記念誌」は、地域の歴史を考えていく大切な資料であり、学校の統廃合によって貴重な地

域の歴史が失われていると危惧される中、「足元の記憶をきちんと記録し、次の世代に残すことは、教職員の責務ではないか」とも言っている。

本校では、本年度の3学期からの授業にあたり、現在、記念誌や写真資料をデータ化し、児童が検索できる環境を整えているところである。

■引用文献

- 生野金三・香田健治・生野桂子（2019）昭和33年と昭和43年の学習指導要領に関する研究. 総合福祉科学研究, 10: 39-47.
- 池野範男・的場正美・安野功 他123名（2019）小学社会3年, 日本文教出版.
- 宇都宮明子（2016）歴史意識の教育目的概念化に向けての考察. 佐賀大学教育学部研究論文集, 1: 41-53.
- 宇都宮明子（2017）歴史意識を育成する歴史教育論の構築に関する考察. 佐賀大学教育学部研究論文集, 2: 1-14.
- 大石学・小林宏己 他50名（2019）小学社会3, 教育出版.
- 大森照夫他（1986）社会科教育指導用語辞典, pp. 152-153, 教育出版.
- 北俊夫・小原友行 他99名（2019）新しい社会3, 東京書籍.
- 教育出版（2019）令和2年度版「小学校社会3」年間指導計画・評価計画（案）https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/2020shou/shakai/files/r2shakai3_nenkeihyouka_2004.pdf（2020年11月10日閲覧可能）.
- 今野日出晴（2017）学校史から歴史を考える. 社会科・地図 NEWSLETTER 第3号2017.5東京書籍: 4-5.
- 斎藤博（1953）歴史的意識の発達. 信濃教育会教育研究所紀要, 19: 24-59.
- 東京書籍（2019）令和2年度小学校社会科用「新しい社会」年間指導計画作成資料【3年】https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/shakai/data/shakai_keikaku_s_3_20200214.pdf（2020年11月10日閲覧可能）.
- 中藤淳（1986）小学生の「身近な地域」に関する歴史的時間概念の研究. 新地理, 34-3: 31-44.
- 日本文教（2019）令和2年度版年間指導計画・評価規準3年 https://www.nichibun-g.co.jp/textbooks/s-shakai/download/r2r2_shakai_nenkei_3.pdf（2020年11月10日閲覧可能）.
- 藤井千之助（1968）II 歴史意識の調査並に総合的思考の構造に関する実験的研究まとめ. 社会科教育論叢, 15: 2-5.
- 松岡葉月（2006）博物館の体験学習における児童の歴史意識の発達の変容—小学校第三学年単元「昔のくらし」からの考察—. 社会科教育研究, 97: 27-39.
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説社会編（平成20年6月）https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_003.pdf（2020年11月10日閲覧可能）.
- 文部科学省（2009）小学校学習指導要領（平成20年3月）第2章第2節 社会 <https://www.nier.go.jp/guideline/h19e/chap2-2.htm>（2020年11月10日閲覧可能）.
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）, 平成29年3月.
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編, 平成30年2月, 日本文教出版.
- 文部科学省（2019）平成29年改訂の小・中学校学習指導要領に関する解説 Q&A, 令和元年11月, https://www.mext.go.jp/a_menu/shoutou/new-cs/qa/1401386.htm（2020年11月10日閲覧可能）.
- 文部科学省（2020）教育の情報化に関する手引—追補版—, 令和2年6月, p. 220, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00117.html（2020年11月10日閲覧可能）.
- 文部省（1958）小学校学習指導要領（昭和33年10月）第2章第2節, 社会 <https://www.nier.go.jp/guideline/s33e/chap2-2.htm>（2020年11月10日閲覧可能）.

文部省（1960）小学校社会科指導書（昭和35年6月），二葉株式会社。

文部省（1968）小学校学習指導要領（昭和43年7月）第2章第2節，社会 <https://www.nier.go.jp/guideline/s43e/chap2-2.htm>（2020年11月10日閲覧可能）。

文部省（1969）小学校社会科指導書（昭和44年5月），大阪書籍。

文部省（1977）小学校学習指導要領（昭和52年7月）第2章第2節，社会 <https://www.nier.go.jp/guideline/s52e/chap2-2.htm>（2020年11月10日閲覧可能）。

文部省（1989）小学校学習指導要領（平成元年3月）第2章第2節，社会 <https://www.nier.go.jp/guideline/h01e/chap2-2.htm>（2020年11月10日閲覧可能）。

文部省（1999）小学校学習指導要領（平成10年12月）第2章第2節，社会 <https://www.nier.go.jp/guideline/h10e/chap2-2.htm>（2020年11月10日閲覧可能）。